

## 生世界をめぐる哲学的思考の移植の運動としての「現象学的社会学」

東京大学大学院 高艸賢

### 1 目的

本報告の目的は、人間によって生きられる世界を記述する哲学を社会学へと移植する運動として、「現象学的社会学」(Phenomenological Sociology)を捉えることである。実証主義と演繹的理論構築への反発を背景としつつ 1960年代に始まった「現象学的社会学」は、A.シュッツの残した著作を起点として哲学的・社会学的研究を蓄積させ、ひとつの学派と見なされるに至った。しかし、今日に至るまで「現象学的社会学」の理論と問題関心は多様に枝分かれしており、その歴史的過程を反省的に回顧する研究動向が形成されつつある。本報告は、「現象学的社会学」の展開過程が、単なる現象学的社会学への導入ではなく、社会学的関心の下での 20 世紀哲学の移植として理解されねばならないことを示す。

### 2 方法

「現象学的社会学」の継承と展開として注目されている T.ルックマンと I.スルバルの著作を扱い、彼らが構想した理論および彼らの問題関心を明らかにする。また、ルックマンとスルバルの理論的展開の背景として、彼らにおけるシュッツ理論の受容の特徴を明らかにする。

### 3 結果

ルックマンは実証主義に対する危機意識の下、経験科学としての社会学と哲学としての現象学を峻別する必要性を見だし、意識における構成分析によって社会学を基礎づける原社会学 (protosociology) を構想した。この関心の下で、ルックマンはシュッツをメタ理論たる現象学として理解し、現象学的に基礎づけられた社会理論の構築を目指した。他方で、スルバルは社会的現実が主観的かつ間主観的に形成されるプロセスを記述するため、「プラグマティックな生活世界理論」を構想した。スルバルは、現象学を反省的意味構成のメカニズムを記述する理論として扱いつつ、シュッツの著作の中に現象学の諸学説やプラグマティズムといった多重の契機を見いだすことで、意味の反省性と行為の社会性を社会的現実の生成における二つの契機として位置づけた。

### 4 結論

「現象学的社会学」の展開過程は、生きられる世界を主題とする 20 世紀哲学がシュッツを媒介して社会学に移植される運動として理解できる。この運動は決して一様ではなく、問題関心の分化に従って理論的およびメタ理論的に展開されてきた。「現象学的社会学」は、シュッツ自身や彼の同時代の哲学との対話を継続することで、さらなる理論的発展を遂げる可能性がある。

### 文献

- Luckmann, Thomas, 1979, "Phänomenologie und Soziologie," Walter M. Sprondel und Richard Grathoff hrsg., *Alfred Schütz und die Idee des Alltags in den Sozialwissenschaften*, Stuttgart: Enke, 196-206.
- , 1983, *Life World and Social Realities*, London: Heinemann Educational Books.
- Schütz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Wien: Verlag von Julius Springer. (=2006, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社.)
- Srubar, Ilja, 1988, *Kosmion: Die Genese der pragmatischen Lebenswelttheorie von Alfred Schütz und ihr anthropologischer Hintergrund*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.